まちのカルチャーカフェ

先生。自然と人間との良い 関係ってなんですか? 撹乱が多様性を生むって どういうことですか?

2019.11.6 (水) 19:00-20:30

東京学芸大図書館カフェ note cafe

一般 ¥1500 学生 ¥500

1ドリンク付き



私たちが小柳先生のことを知ったのは、2年ほど前である。どうも学内にヤギ使いがいるらしいというウワサからだった。確かにそれからしばらく、学内にヤギの目撃情報が飛び交っていた。今、図書館前でヤギとすれ違いましたといった内容のラインが、学生から届いたりしたものだ。

調べてみると、キャンパスの西北にある教材植物園という所に、確かにヤギがいた。教材植物園に行かれたことはあるだろうか?それほど広くはないものの、畑あり、田んぼあり、果樹園ありと、およそ東京とは思えない良い所である。誰でも自由に入れるが、勝手にござを敷いて花見などをしてはいけないそうだ。ヤギはその一画に飼われていた。聞いてみると、小柳先生についた学生が、ヤギを放牧してどれくらい雑草を食べるかを研究していたのだという。その学生はすでに卒業し、現在、残念ながらヤギはいない。

実はこのヤギ、東京農工大の研究用のヤギで、私たちが今年の7月20日に大久保農園で行った<u>「まちのカルチャーカフェ」出張版</u>に来てくださったヤギたちのお仲間筋だった。あの折のヤギの食欲がすさまじかったことは、以前に報告したが、学芸大でのヤギの食欲はそれほどではなかったらしく(もちろん、すべてを食欲の問題にしてはいけないのだが)、予想した通りの研究成果はあがらなかったらしい。ただヤギと子どもたちとの触れ合いは好評で、近隣ではヤギのいる所として、ちょっぴり有名になったようだ。

しかし今はヤギの話ではなくて、小柳先生の話をするのだった。先生は 教材植物園に隣接する環境教育研究センターの研究者で、ご専門は、食 べる側のヤギではなくて、食べられる側の雑草だった。いや、「雑草」 などというと小柳先生に怒られるかもしれない。 草原は「攪乱」を受けることで成立するという。攪乱とは恐ろし気な言葉だが、自然や人の手で環境をかき混ぜることだ。草原は攪乱されないと、やがて森林になってしまうのだそうだ。たとえば人の手が入らないと、堤防や道や畑などに、ニョキニョキと木が生えてしまうのである。それが草原のままなのは、人が手を入れているからだ。日本では一万五千年前から、人為的攪乱が行われてきて、今の風土ができたという。私たちが何となく懐かしく思う自然豊かな里山も、実は攪乱の結果、生み出されたものなのである。 (正確には、すべての草原がほっておくと森林になるわけではないのだが、わかりやすくまとめてしまうとこんな感じだ。)

ただ攪乱はすればよいというものではない。土を掘るのも肥料をやるのも攪乱だが、やり過ぎれば植物の種類が減ってしまったり、特定の外来種が増えてしまったりする。多様な植物を維持することが難しくなってしまうのである。適度に攪乱する方法は、日本の農家において伝統的に練り上げられていて、この時期に何を植えて何を取るとか、何を取っちゃいけないとか、一定の時期に草地に火を入れることで、土壌のPHを調整するといったことをしてきたのだという。

科学的知識はなくても「伝統知」というものがあり、それによって日本人は合理的に持続可能な環境を維持してきたのだ。だが、それを身をもって実践した人は、今やほとんど80歳以上になってしまった。そのことを小柳先生はたいへん心配されている。

そこで今、小柳先生は「食」に注目している。植物が多様であることの メリットは、食によく現れるからである。確かに植物の種類が少なくな れば、食べるものの種類も少なくなる。 食をキーワードにして、伝統知を見直し、環境の多様性、そして草原の 多様性の維持と回復を目指すというのが、先生の研究の一つの柱である。

この日、話の聞き手が小柳先生のことを「草原フェチ」と呼んだ。なんと失礼なことを言うのだと思ってあわてて先生を見たら、ニッコリ微笑まれて、私の草原デビューは修士論文の時でしたとおっしゃった。こりゃ本当に草原がお好きなのだと思った。静かにお話になったが、研究対象に対する熱い思いに支えられた専門的な話は、たいへんおもしろかった。

藤井健志

東京学芸大学教授・元副学長/まちのカルチャーカフェ主宰・マスター東京学芸大図書館カフェnote cafe発起人



